

大塚啓二郎／フランク・プレイス編

『土地制度と自然資源の管理』

—アジアとアフリカの農村社会の比較研究—

Keiji Otsuka and Frank Place(eds.), *Land Tenure and Natural Resource Management: A Comparative Study of Agrarian Communities in Asia and Africa*, The Johns Hopkins University Press, 2001, 412pp.

熱帯の発展途上地域における天然資源の劣化は、それに依存する人々の生活に対する直接的な脅威である。人口増加や不適切な政策・開発等によって、森林の過剰な開墾や耕地の劣化がすすみ、生活水準の低下を招いている地域も多い。そして生活水準の低下は、更なる天然資源の劣化を助長していく。農業以外の産業が限られているこれらの地域で、このような「悪循環」は、どのようにして断ち切ることができるのだろうか。ここ数年来現地でフィールドワークを重ね、援助の現場にも多少なりとも関わってきた私にとっては、憂鬱この上ない問題である。

本書は、土地保有の制度変化と天然資源の管理との関係に注目し、「誘発的制度改革」の理論を援用して、この複雑な関係を説明しようとしている。天然資源の希少化や農業の商業化が、伝統的な土地制度を、資源へのアクセスを規制し、投資を誘発する方向へと改変させ、樹木作物と一年生作物を組み合わせたアグロフォレストリーなどの労働集約的・資源保全型の土地利用や、利用グループによる効率的な資源管理を可能にしていくという仮説を設定している。そして、アジア・アフリカにおける事例研究から、このような制度変化を引き起こす要因と、その結果としての資源管理に関する経済的効率性・公平性について、計量経済学の分析手法を用いて定量的に実証を試みている。

本書は5部10章からなっている。第1部(第1章から第2章)は序論で、本書の課題と理論的枠組み、及び実証の方法論が記されている。本論である事例研究は、3部(第2部から第4部)で構成されている。第2部(第3章から第5章)は、ガーナ、スマトラおよびマラウイを事例に、焼畑を生業とし、大家族保有を基本とする部族の慣習的土地制度が、土地の希少化、カカオ、シナモン、ゴムなどの樹木作物の普及とともに、より個人の保有権の強い制度へと変わっていく「個有化」の過程と、その結果が資源管理

に与える影響を分析したものである。第3部(第6章, 第7章)は, 国家的な政策が, 現在の土地制度に強い影響を与えているウガンダ及びベトナムを事例とし, 制度間で資源管理パターンの変化がどう異なるかを分析することによって, 政策が資源の管理にどう影響を与えてきたかを検討している。そして, 第4部(第8章, 第9章)では, ネパールの丘陵地域における非木材林産物の管理, インナータイ地域と日本の入会林における木材の管理を比較することにより, 共有資源管理の生成過程及びその効率性・公平性に関する分析がなされている。最後に, 第5部(第10章)の結論では, 事例分析の結果をまとめて一般化する形で, 天然資源管理のあり方について総合的な議論を展開し, 政策提言をおこなっている。

天然資源管理における, 土地ないし資源の保有権の重要性は, これまでにも多くの研究で主張されており, 個人や集団への適切な保有権の画定が, 土地への投資や資源の保全を促すための必要条件であることは, 現在ほぼ定説となっている。しかしながら, 本書のように, 資源の保有権の「個有化」と「共有化」の過程及びその効果を, 統一的な仮説の下に定量的に実証した研究はこれまで見られなかった。これは間違いなく本書の最大の特徴であり, 功績である。

加えて特徴的なのは, その逆の因果関係, すなわち樹木作物の市場にアクセスが可能で, その収益性が高い場合, その土地に対する利用者の権利が将来強まることを期待して, 植林などの投資をおこなう場合があるという仮説の実証に成功している点である。つまり本書では, 慣習的な土地制度と住民による自律的な制度適応の中に, 天然資源をより効率的に管理するインセンティブを見出そうとしているのである。このようなポジティブな姿勢は, 今後の住民による天然資源管理のあり方に, 一筋の光明を期待させるものである。

事例分析は, アジア・アフリカの広範な地域を網羅しており, それらから一般性の高い結果を次々に導き出している。例えば, ガーナとスマトラの事例における土地保有の「個有化」への傾向と, アグロフォレストリーの普及パターンはよく類似しており, 仮説の説得力を増すことに成功している。ベトナムの事例における森林破壊から再生へのドラスティックな変化や, ネパールにおける森林利用グループへの権限の付与による資源管理の効率性の向上は, 土地制度に関する政府の適切な介入の重要性を, 改めて認識させる内容となっている。また, 日本とネパ

ールにおける共有資源管理の比較には, 資源の「個有化」と「共有化」の相違に関する興味深い考察が含まれており, マラウィの事例では, 資源の希少化が, 必ずしも資源の効率的な保全に結びつくわけではないことを教えてくれる。

最後の章で述べられる結論にも魅力的なものが多く, 個人で保有化された土地に植林などの投資インセンティブが存在する一方で, 慣習的な土地制度の下にある森林の多くは, 依然として事実上のオープン・アクセスの状態にあること, 保有権の弱い制度下における焼畑耕作では, 保有権が弱まることを防ぐため, 作付けの休閑期間を短くする傾向にあること, 非木材林産物の利用が卓越する森林の保全は共同で, 枝打ちなどの管理が必要な用材の生産は, 個人で行うほうが効率的であることなど, 実証分析ならではの簡潔で明快な結論には, 説得力が感じられる。

このように, 本書が私に与えた衝撃は非常に大きかった。しかしながら, 一読して, 若干の疑問や違和感を持ったこともまた事実である。まず, 土地制度の変化, 農業の商業化及びアグロフォレストリーの普及の結果としての, 土地保有の公平性の問題である。本書では, 分析の結果, 土地制度の変化によって, 土地保有の不平等が拡大した証拠は見られなかったと論じている。本書で扱っているような農業の限界地の場合は, 確かにそうかもしれないが, この結果が, 果たして一般的なものとして扱おうのかどうかは疑問が残る。例えば, 同じ樹木作物でも, ユーカリやアカシアマンギウムのような早生樹種の単一の植林(おそらく本書のアグロフォレストリーよりも, 高い規模の経済性を持つであろう)が普及した場合はどうなるであろうか。また, コミュニティ外部との関係においても, 不平等化は回避されるのであろうか。農業の商業化によって, コミュニティ外部との関係が深まり, 結果として資源を搾取され, 自立性が失われていくという批判的な議論に対して, 今ひとつ説得力に欠けるような気がする。

次に, 住民の制度適応能力の限界についてである。本書でも一部明らかになったように, 住民が, 制度変化によって資源の希少化等に適応していく能力には限界が存在する。例えば, 逆に地域的に資源の希少性が高まらなければ, 資源の保全へのインセンティブが高まらないことにもっと注目すべきであろう(ネパールの事例で軽く触れられてはいたが)。こ

の場合、資源の希少化が進行しても、工業製品や輸入材などの安い代替財が流入してくれば、インセンティブを失うことになるし、その地域では豊富ではあるが、世界的に見て貴重であるような資源の保全是、この仕組みではできないということになる。どのような条件下で、住民の制度適応能力が有効に働くのか、より多くの場合わけが必要だと考える。

最後に、前述のコメントと矛盾するかもしれないが、結論や政策提言に目新しい内容が少なかったように感じた。確かに明快でよくまとまっているが、現場に深く関わっている人から見れば、いわば「当たり前ではないか」と感じるものも多いのではないだろうか。もっともこれは、経済学という学問自体の方法論に起因するような気がしている。現場の経験を重んじる実務者やフィールドワーカーの思考方法が、概して帰納的であるのに対して、経済学の実証分析における思考方法は、現地からのフィードバックはあるにせよ、基本的には演繹的であるからである。そういう意味では、フィールドワーカーの研究がこれを補い、研究に奥行きを与えることも十分可能である。例えば本書の場合、制度変化の文化的な要因、すなわち変化がコミュニティの中でどのように認識され、正当化されているかといったテーマは、制度変化がコミュニティに定着する際の重要な要因の一つであると考えられるが、経済学で実証することはできない。本書で扱っている内容は、経済学者以外の幅広い関心を集めうるという意味で、今後学際的な研究に発展する要素も持ち合わせている。

ともあれ、全体的には、土地保有という「制度」とアグロフォレストリーという「技術」の革新が、一定の地理的・社会的条件下において、貧困と環境破壊の「悪循環」を打破する鍵になるという前向きな希望を伴った、素晴らしい内容の本であり、途上国における持続可能な農村開発に興味を持つ研究者にとって、必読の書であるといえるのではないだろうか。

天然資源と住民生活は、常に複雑に絡み合っていて関係している。地域が持続的に発展を遂げるためには、両者の関係をよく理解し、住民主導でバランスの取れた開発計画の策定が必要不可欠である。今後更なるグローバリゼーションが進行していく中で、本書で実証されたような住民の制度適応のしくみが、できるだけ有効に機能することを望みたい。

[生方史数]